

※文字の大きさは MSゴシック /12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
 ※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、適宜文章中に挿入してください。各項目の枠の上下幅は変更可能です。
 ※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

エントリー名：赤川峰大	
学校名：神戸大学附属小学校	
活動名：先生版スタートカリキュラム；“安心・成長・自立”を大切にす人材育成	
解決すべき課題：	
<ul style="list-style-type: none"> ・教職への不安から学生の教職希望者が減少し、採用試験の倍率が低下している。 ・新規採用教員（臨時採用教員を含む）が学級、授業づくりに悩み、教職を諦める場合もある。 ・上記の課題を解決する新しい支援や研修が求められている。 	
目標・方針：新しい教員研修プログラムを開発し、スタート教員をよりよく育成する	
<p>新しく教育に携わる、新規採用教員・臨時採用教員・教育実習生・インターンシップ生等（以下『スタート教員』と呼ぶ）が“安心”して学級、授業づくりに取り組み、教員として“成長・自立”できるようにするための研修プログラムを開発・実践する。</p>	
活動内容：	
（研修Ⅰ）学級づくりについての研修	
<p>学級づくりにおける“安心”のために、二段階で学級担任をする研修の仕組みを構築した。具体的には、前期はベテラン教員が担任をしている学級の副担任としてスタート教員を位置付け、後期はスタート教員をその学級の担任として位置付けるという仕組みである。前期は、基本的に学級担任であるベテラン教員が児童の前に立ち、学級づくりを行った。学級づくりの基盤が整ってきた5月末からは、朝の会や給食指導など場面を限定して、段階的に学級担任の役割を副担任であるスタート教員に委ねていった。後期は、スタート教員が基本的には学級担任としての役割を担った。ベテラン教員は教室の後方でスタート教員の学級づくりを観察し、放課後等に気づいた点を指導することで、“成長・自立”に向かう支援を行った。</p>	
（研修Ⅱ）授業づくりについての研修	
<p>授業づくりでも二段階での研修の仕組みを構想した。具体的には、前期は一斉授業を成立させるための基本的な授業技術に焦点をあてた研修を行い、後期は前期で学んだ授業技術を基盤に、主体的・対話的で深い学びに焦点をあてた授業づくりに関する研修を行った。スタート教員が授業づくりをする上で最も困難なことに、多数の児童がいる教室の中で一斉授業を成立させることがある。基本的な授業技術がなければ“安心”して授業づくりを深めることは難しい。そこで前期はこの視点でスタート教員の授業を参観し、フィードバックすることに焦点を当てて研修を行った。後期は、主体的・対話的で深い学びに焦点をあてた授業づくりの研修である。ここでは授業技術という狭い範囲だけでなく、主体的・対話的な学びによっていかに深い学びが実現したかを視点として、教科ごとに求められる資質・能力に焦点をあてた研修を行うこととした。</p>	
取組の過程：	
(1) “教えること”を共有する難しさと改善策	
<p>教員に求められる知識や技能は多岐に渡るため、スタート教員は何から習得すれば良いかわからず、不安になっていた。またベテラン教員は、経験に基づいた即時的な対応をするため、観察しているだけでは、それらの知識や技能の体系、重要度がスタート教員に伝わりにくいという課題が生じていた。そこで特にスタート教員が身に付けるべき重要度が高い知識や技能をベテラン教員が精選し言語化する取組を行った。具体的に「学級づくり」では、ベテラン教員が想定する学級づくりの道筋を「学級の発達段階」として整理し示した。例えば「4月始めの学級は一般的に、学級のルールが定着しておらず、一人一人がバラバラの状態である第1段階であり、第1段階を第2段階に上げるために大切なことは、学級のルールを明確に児童と共有すること（後略）」と示している。学級づくりの段階と支援を整理し、文章化した。「授業づくり」では、一斉授業を成立させるための基本的な授業技術を10個に絞り、整理した。この表はスタート教員の授業を参観する際に評価シートとしても活用した。教員に求められる知識や技能を言語化し、スタート教員と共有することで、“成長・自立”につなげようとした。</p>	

段階	児童の様相	想定	支援方法
1	・子供同士に交流が少ない。 ・学級のルールも定着していない。 ・一人一人がバラバラの状態。	4月	○学級のルールの明示 ○ペア学習
2	・学級のルールが徐々に意識され始める。 ・子供同士の交流も活性化してくる。 ・交流は気心の知れたグループ内に留まる。	5月末	●スポーツデーでの実行委員会活動 ○グループ学習
3	・学級のルールがかなり定着 ・グループ同士のぶつかり合いの結果、一定の安定に達する。 ・指導力のあるリーダーがいるグループなどが中心となって複数のグループが連携できる。 ・学級の半数の子供たちが一緒に行動できる状態。	6月末	●宿泊活動の実行委員会活動
4	・学級のルールが子供たちにほぼ定着している。 ・学級全体の流れに反する一部の子供やグループともある程度の折り合いがつけられている。 ・ほぼ全員で行動できる状態。	11月末	●ステージの実行委員会活動
5	・学級のルールが子供たちに内在化されている。 ・一定の規則正しい全体的生活や行動が温和な雰囲気の中で展開されている。 ・子供たちは自他の成長のために協力できる状態。	1月	●卒業単元の実行委員会活動

(2) 授業観を育てることの難しさと改善策

スタート教員は、「授業は、ベテランから正しい方法を教授されるもの」と考える傾向が強かった。今後の“成長・自立”つなげるためには、授業観を「授業は、唯一の正解があるものではなく、子どもの事実に基づいて常に改善し続けるもの」と変容させる必要があった。またどのスタート教員にも光る個性があり、それを生かすことも肝要である。そのための取組を行った。

■授業くらべ研修

授業くらべ研修とは、同一学級集団を対象に、スタート教員、ベテラン教員がともに授業を行い、発話記録をもとに児童の事実を比較する研修である。この研修の目的は、スタート教員が自分で授業分析の視点をもって、ベテラン教員の授業と自分の授業を比較することである。自ら視点を決めることで、主体的に授業を考察する経験となった。

■Team 道徳研修

Team 道徳研修とは、①一方のクラスでベテラン教員が道徳の授業を行い、学年部の教員全員で参観する。②事後検討会を行い、改善案を立てる。③別のクラスでスタート教員が②の改善案をもとに同じ教材で授業を行い、学年部の教員全員で参観する。④事後検討会を行う。という手順で行う研修である。第1回目の授業について学年団の全教員で協議を行い、課題を指摘し合って第2回目の改善案を考える仕組みであるため、当然ベテラン教員の授業に対して様々な指摘がなされることになる。この機会が、スタート教員がベテラン教員の授業も自身の授業同様、児童の事実を根拠にした様々な見方がなされるべきものであると捉える経験となった。

活動の成果：

■スタート教員が“安心”して実践を積み、“成長・自立”へ向かって変容した

スタート教員である新規採用教員Aは、研修の振り返りにおいて「細かい技を一つひとつ見て学び、やってみて困った上で改めて学ぶということができた研修だった。」と記述している。二段階での担任制を導入することで、継続的に他の先生の指導を見て学んだ上に、ベテラン教員がつくった学級づくりを基盤に担任として学級づくり（第5学年）をしたため、後期も安定して学級経営を行うことができ、本人の自信にもつながった。スタート教員が困らないようにするのはなく、必要なことを教えた上で、考えさせることが育成に効果的であることが改めて分かった。

■指導内容を精選、言語化する過程が、ベテラン教員の学びとなった

スタート教員のために指導内容を精選、言語化する過程で、ベテラン教員の教育活動が整理された。ベテラン教員にとっても自身の教育活動を振り返り、改善する機会となった。

■本研修を持続可能にするために、教員の人数・時間を確保する組織的な工夫が導入された

本取組を持続するためには教員の人数・時間確保をすることが重要だと考え、全学年で「教科担任制」「学年担任制」を導入した。これにより本研修プログラムが拡散し、研修を経験した臨時採用教員、実習生等の多くが、自信をつけてそれぞれの進路で教壇に立っている。また学校全体として教育の質が担保され、子どもが安定的に育つようになったことが何よりの成果である。

教員取組	児童	児童の学び
1	子供同士に交流が少ない。	子供同士の交流も活性化してくる。
2	学級のルールも定着していない。	学級のルールが徐々に意識され始める。
3	一人一人がバラバラの状態。	学級のルールがかなり定着。
4	学級のルールが定着していない。	学級のルールが子供たちにほぼ定着している。
5	学級のルールが定着している。	学級のルールが子供たちに内在化されている。